

## プログラム・ノート

西村 祐

### ハイドン：ピアノ三重奏曲 ト長調 Hob. XV:25 「ジブシー・トリオ」

ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)は、交響曲や弦楽四重奏曲など、現在親しみのある様々なジャンルを確立したことで知られるが、ピアノとヴァイオリン、チェロによる三重奏曲もそのひとつである(まだチェロの役割は大きくないが)。中でもハイドン2度目のロンドン滞在中の1795年に書かれたと言われる「ジブシー・トリオ」は演奏機会に恵まれる名作。変奏曲形式の第1楽章からヴァイオリン(本日はフルートで演奏)とピアノの名人芸に注目だが、中でも「ジブシー・ロンド」として知られる第3楽章でのスピード感と熱気は手に汗を握る。

### モーツァルト(工藤重典 編曲)：

#### ヴァイオリン・ソナタ第22番 イ長調 K. 305 (フルートとピアノによる)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の「ヴァイオリン・ソナタ」と呼ばれる作品のうち、K. 305を含む『選帝侯妃ソナタ集』(1778年出版)前後からは鍵盤楽器とヴァイオリンが緊密な連携を見せる。この全6曲からなる曲集のうち5曲が2楽章形式だが、彼が大きな影響を受けたJ. C. バッハ(1735～82)やハイドンではよく見られる。K. 305はイ長調の華麗な作品で、頻発するクレッシェンドや両楽器のユニゾンなど、作曲されたマンハイムのスタイルを踏襲している。

今回はヴァイオリン・パートを工藤自身がフルートのために編曲したヴァージョンが使われる。フルートでは出すことのできない低音を含むフレーズを高くしたり、重音を変更する以外はほとんど手を加えていないが、ヴァイオリンでの演奏とは異なり、フルートならではの軽く敏捷な音楽へ変化するさまにも注目したい。

### ウェーバー：フルート三重奏曲 ト短調 作品63

初期ドイツ・ロマン派を代表するカール・マリア・フォン・ウェーバー(1786～1826)の三重奏曲はオペラ『魔弾の射手』の作曲中(1819年)に書かれ、プラハ時代(1813～17年)に親しかった医師、フィリップ・ユングに献呈されている。ロマン派のレパートリーが少ないフルートにとって大変重要な作品のひとつで、充実した響きや旋律の美しさ、劇的な展開が詰まった名作。ピアノに導かれる旋律が波紋のように広がってゆく第1楽章冒頭から息をのむ。第2楽章はトリオを持たないスケルツォで、打楽器的なパッセージと優雅な旋律の対比が特徴。第3楽章は「羊飼いの嘆き」と題されているが、このタイトルはゲーテの詩に基づいている。華やかなフィナーレは演奏効果満点で、3人の丁々発止のやり取りを聴くことができる。